

冬期サガルマータ南西壁登攀

尾形好雄

1953年5月29日にエドモンド・ヒラリー卿とテンジン・ノルゲイ氏に依って世界最高峰のエヴェレスト（ネパール名、サガルマータ8,848m）が初登頂されて以来、この40年間にその登頂者は延べ490名近くにも及ぶ、と言う。ヒマラヤの数多い峰々の中でこれだけ大勢の登頂者を迎えている山も他にあまりない。

また、初登頂以来この最高峰を舞台にヴァリエーション・ルートからの登頂、冬期登頂、トラヴァース、タイム・トライアルなど色々な形態の登山が試みられ、様々なドラマが展開されてきた。これも世界最高峰が故の宿命なのであろう。

サガルマータの頂上からスッパリとウェスタン・クム側に切れ落ちた南西壁は古くから野心あるクライマーを魅了してきた。

1969年秋に日本山岳会隊が初めてこの南西壁を試登して以来、数多くの登山隊が果敢な挑戦を繰り返してきた。そして1975年9月28日、クリス・ボントンの率いる英国隊によってこの南西壁はついに陥落されたのである。

その後も南西壁は何度かトライされ、昨年迄に第3登がなされていた。然し、この南西壁を敢て冬期に登ってみよう、という野心的クライマーは現れていなかった。

群馬県山岳連盟は創立50周年記念事業の一つとして1991年12月～1992年2月の敢て冬期にサガルマータ南西壁登攀、という計画を立てた。

群馬県山岳連盟は1941年の創立以来、国内の山岳はもとよりヒマラヤをはじめとする世界の山々に足跡を印してきた。特にヒマラヤ登山では1971年春のダウラギリⅣ峰偵察、翌72年春の本隊以来、1987年／88年冬のアンナプルナⅠ峰南壁の冬期初登攀まで、偵察・本隊を合わせて7隊を派遣している。

また、岳連加盟の単一山岳会独自の海外登山が14隊、会員の岳連以外の登山隊へ個人資格で参加した海外登山87隊などを合わせると、群馬岳連関係者の海外登山の合計は108隊という多きを数える。

これらの経験を踏まえて、冬期サガルマータ南西壁計画が立てられたのであるが、この計画は抑々、1984年の冬期アンナプルナⅠ峰南壁登攀計画の準備中に、「今の中学生や高校生が山登りを始めて、やがてヒマラヤの高峰登山を志したときに飛びつける課題を！」と10年先を展望して立てられた長期的な計画であった。実際、今回参画したメンバーの内4名は、最初（1984年）のアンナ南壁計画の頃、未だ中学、高校生だった者である。

1980年台に入って世界の登山界の頂点では冬期8,000m峰登山が標榜されるようになり、果敢な挑

1. 高所登山の実践と今後の課題

戦が展開された。日本でもサガルマータ、マカルー、ダウラギリ、マナスル、アンナプルナ等の冬期8,000m峰登山が試みられ、その内、サガルマータ、マナスル、アンナプルナの冬期登頂が群馬岳連の会員に依ってなされた。このように80年代に日本で冬期8,000m峰登山を牽引してきたのは、唯一群馬岳連と言っても過言ではない。

然し、この間には群馬の誇る、否、日本の誇る山田昇をはじめとする優秀なクライマーが相次いで山に逝き、冬の南西壁計画を支えるべき中核メンバーを喪失した。「群馬モンロー主義」を唱え、1971年春のダウラギリⅣ峰以来、群馬岳連を中心としたヒマラヤ登山の実践にこだわり続けてきた八木原暁明氏もここに冬の南西壁を陥すためには外部からの隊員補充もやむ無しの断を下され、日本ヒマラヤ協会 (HAJ) 会員の中から数名が補強されることになった。

そんな折、インド・チベット国境警察 (ITBP) からHAJヘシッキム側からのカンチェンジュンガ合同登山の申し入れがあった。

冬のサガルマータ南西壁をスピーディに登るには、秋に8,000m峰登山を実行しておくことが必要かと考えていた八木原氏は、この合同登山の申し入れを願ってもないチャンスとばかりに南西壁登山のプレ登山と位置づけて実行されることになったのである。

こうして1990年の秋、カンチ出発迄6ヶ月弱と押迫った時、カンチから冬期サガルマータ南西壁を目指すメンバーが集結した。

シッキム側からのカンチ登山は前号 (VOL.7号) で既報の通り、戦前ドイツ隊が果敢な死闘を展開した北東支稜に転進して登頂を果たし、メンバーの大半も8,000mラインを突破して無事プレ登山を終了した。

一方、カンチに参加しなかったメンバーも夏にブロード・ピークやヌン峰に登頂しての参加で、ほとんどの隊員が高所登山のブランクがない状態で臨む事が出来た。唯、春に4ヶ月近くの遠征を実施したため、国内での準備活動が遅延し、その準備期間不足が南西壁登山に支障をきたす事になった。

*

カトマンズがヒンドゥー教徒最大のお祭りダサインで賑わう10月、隊員達は相前後してカトマンズ入りした。ダサイン祭の最中にもかかわらず、ルクラへのチャーター・フライトは確保され、ルクラへの隊荷輸送は順調に運んだ。

ナムチェ・バザールからヤクに依るキャラバンを三次に分けてスタートさせ、隊員達は積極的に高度順応訓練に励んだ。

第一次の順応訓練はペリチェの東山 (5,099m峰) で行われた。ペリチェからの高度差810mを速い者は1時間を切る位のタイムで登った。

ペリチェでの高度順応が出来上がった者から順次ロブジェに上がり、第二次の順応訓練に入った。ロブジェでの順応訓練はポカルデ・ピーク (5,806m) で行われた。ロブジェからクーンブ氷河を横断

1. 高所登山の実践と今後の課題

し、コンマ・ラ (5,535m) を越えて、眼下の氷河湖湖畔にC1を設け、さらにポカルデの頂上直下にC2を設けて、隊員達は2回以上登頂しながら順応を図った。

こうしてポカルデでの順応を終えた者から順にBCへ入った。

近年、サガルマータには1シーズンに何隊もの登山隊が入山するようになり、アイス・フォールのルート工作は、最初に登攀用具、人員等を投入した隊が、後から入山した隊から通行料を徴収して通している、と伝えられており、昨秋は1隊員につき300ドル徴収されたという。

今冬は我々の他に韓国の2隊が通常ルートと南稜ルートに挑むことになっており、カトマンズでの話し合いでアイス・フォールのルート工作は共同で行うことにし、器材や人員等は折半で出し合うことにした。

アイス・フォールのルート工作は第一陣がBC入りした11月11日から開始し、16日迄の6日間で終了した。唯、冬のアイス・フォールは降雪が殆どないためテカテカの固い蒼水で、流動も激しく、アイス・フォール・シェルパを常時ルート整備に当てなければならなかった。

11月20日から隊員の6,000m台の順化を図るためC1への荷上げを開始した。この間、各自の体調を見ながら3~6回行い、最終的にC1への荷上げ所要時間は2時間半程に縮まった。この順応訓練で6,000m台の順化を終えた我々はBCで休養しながら12月1日の冬期シーズンの幕開けを待った。

12月1日、いよいよ冬期南西壁に向けて登山活動を開始する。先ず、尾形パーティ (吉田、後藤) と名塚パーティ (佐藤、小西) がシェルパ9名のサポートを得てC1 (6,020m) を建設。C1は前後に巨大なクレバスが口を開けているアイス・フォールの落口に設けた。

翌2日、尾形・名塚両パーティとシェルパでC2 (6,500m) を建設。C1~C2間はほとんど秋のルートをたどり、途中1箇所クレバスにラダーを架けるだけですんなり到達出来た。C2はウェスタン・カムが一段上がった西稜寄りのモレーン・カバーされた氷河上で快適なキャンプ・サイトである。

南西壁基部の6,700m付近には大きなシュルンドが口を開けているが、うまい具合にラダーを架ける必要もなく、難なく越えることが出来た。

シュルンドの上は傾斜35度ほどの氷雪壁が続き、「軍艦岩」を目指して直上する。2日、3日の両日でシュルンドの上に8ピッチ半ルートを延ばして軍艦岩の基部に達し、5日C3 (6,900m) を建設した。C3は軍艦岩の基部で、南西壁では唯一落石の危険から避けられる、と言われたが、長い登山期間中には何度か落石もあり、テントに穴をあけられた。当初C3にはボックス・テントを使用する予定であったが、氷壁にテラスを切ってドーム型テントを設営することが出来たため、荷上げ重量がかなり軽減された。また、登山中盤以降はC2からダイレクトにC4へ移動したり、荷上げをしたためC3はほとんど使われなかった。このキャンプはルート工作時のみと考えればよからう。

C3から上のルートは、先ず軍艦岩の下を左に150mトラバースしてから傾斜40度の氷雪壁を登る。固定ロープの支点にはスノーバーが利いてくれたので助かり、ルートは順調に延びた。C3から8

1. 高所登山の実践と今後の課題

ピッチ上がると75年英国隊のC4跡地でボックス・テントの残骸が見苦しい姿で雪壁にぶら下がっていた。

このC4跡地から20m中央部に向かってトラバースした後、傾斜40度の冰雪壁を直上する。5ピッチ延ばしてから中央の凹状部を2ピッチ左上し、さらに1ピッチ直上すると1970年日本山岳会隊他のC4跡地が現れる。ここも人工キャンプ台やボックス・テントのフレーム、シュラフ、酸素ボンベ、ロープなどが粗大ゴミ化して無惨な姿をさらけだしていた。このキャンプ・サイトは二段になったジャンプ台のようなところで、当時は南西壁の真只中で唯一のキャンプ地と思われたのであろうが、落石の集中砲火を浴びるこの場所によくテントを張ったものだ、と感心させられた。

この先、何本かの朽ち果てた固定ロープに導かれながら、ほぼ中央部にルートを延ばし、8日にC4予定地(7,600m)に到達した。結局、C3～C4間には5日～8日の4日間で23ピッチ半の固定ロープを施した。

12月11日、顕著な灰色のツルムの下にC4を建設した。C4は人工キャンプ台を設置した上にドーム型テントを設営した。

登山開始11日目にしてC4を建設した我々は、いよいよ南西壁の核心部、ロック・バンドへとたどった。

南西壁の8,000mの高みには、高差300mに及ぶ黒々とした垂壁が立ちほだかる。この圧倒的なロック・バンドの突破が南西壁攻略のキー・ポイントとなる。どう見てもこの高所でこの垂壁をダイレクトに攀ることは適わず、右か左にエスケープするしかない。我々は1975年英国隊と同じく、ロック・バンドの左端に喰い込む左クローワールへとルートを延ばすことにした。

11日から14日までの4日間で名塚パーティが17ピッチ、ルートを延ばし、クローワールの入口へと肉迫した。流石にこの高度になるとルート工作のスピードも落ちてくる。

我々がロック・バンドの攻略に奮闘していた13日の未明、韓国のノーマル・ルート隊はサウス・コル直下のC4から隊員1名とシュルパ1名がアタックを敢行したが、強風に阻まれて断念した。一方、韓国の南稜隊の方は13日の深夜から登頂を試みたが、やはり寒気と強風に追い返され、14日の午後C2に敗退してきた。

15日、名塚パーティの最高到達点からさらに半ピッチ程登ると、深く削られたクローワールの入口となる。喰い入るクローワールの幅は3～4mで、両側は逃げ場のない岩壁が聳えている。途中でチョック・ストーンのあるところはクローワール内には雪が詰まっており、50度位の傾斜でせり上がっている。チョック・ストーンは雪に埋もれており、難なく越える。さらに1ピッチ延ばすとランペ(傾斜路)へ続く25m程の垂壁となり、何本かの朽ち果てたロープが垂れ下がっていた。ロープの色はすっかり褪せ、16年の歳月を物語っていた。ここは周りが岩壁に囲まれた井戸の底を思わせるような場所である。

1. 高所登山の実践と今後の課題

16日、ついにロック・バンドの核心部を突破してランペに抜け出た。

この日、尾形・後藤のパーティは垂壁の基部に到達した後、酸素器具を下ろし、無酸素でこの難関に取りかかった。つるつるの堅い岩にアイゼンのツァッケを^ましませながらジリッ、ジリッと高度を勝ち取るスリリングな登攀は8,300mという高所だけにしんどい登攀を強いられた。

この垂壁を越えるとグズグズの岩屑がのっかったランペが右上している。一步踏み出すと落石が起るような状態で神経を使う。素早くチャンネル・ピトンを2本叩き込んでロープを固定してからアップザイレンでセカンドの所まで戻り、酸素器具を装着してロープ類を担いで再び登り返す。この高度で荷物を担いでダブル・ユマーリングは酸素を毎分3ℓにしても苦しい。再びランペに這い上がったから、落石を起こさぬよう慎重にルートを延ばす。ランペは50m程で終わるが、ルートはその手前から3m程の垂壁を登って直上するようになる。強風がゴーゴーと唸り出したのを潮時に、この日はここからC4へ下ることにした。

18日、橋本パーティ（田辺・小田）とシェルパ2名は、尾形パーティの最高到達点からさらに1ピッチ凹状壁にルートを延ばして英国隊のC6（8,350m）跡地に到達した。C6跡地には急峻な雪壁にサミット・ボックス・テントの残骸が残り、その側には昨年春の韓国隊のものと思われる旧ソ連製の酸素ボンベが無造作にデポしてあった。

この雪壁ではとてもテントを設営することは出来ず、4m程上に岬のように突き出した幅の狭いスノー・リブをC5予定地とした。

この高度まで上がると南峰は指呼の間に望まれ、隣接するローツェも低く見えるようになる。

イエロー・バンドの下に断続する雪のバンドは所々嫌らしいスラブのトラバースを強いられそうであった。南峰に突き上げるクローワール手前のロック・ステップも赤茶けたスラブを見せており、苦勞させられそうだ。

ここまでは予想以上に順調だった。12月中旬に早くも核心部のロック・バンドを突破できたのですっかり気をよくしてしまったが、サガルマータの機嫌がよかったのもここ迄で、冬の魔手は直ぐそこまで忍び寄っていたのである。

21日、尾形、後藤、パサン・カジの3名は再度C5建設に向かい、猫の額程のスノー・リブをカッティンクして整地するも底辺が三角形にしかならず、テントの片方は空間にはみ出してしまふ。然し、ここ以外にテントを設営出来そうな場所は見当たらず、兎も角ここに張る事にする。午後から天候が崩れだし、強風に^煽られながらテントを広げ、苦勞しながらポールを入れて立てようとする、ポールは寒気のせいかポキ、ポキと折れてしまつて、あれこれ悪戦苦闘しながら何とか設営しようと努力するも、いたずらに風で^{はんろう}翻弄されるだけでうまくいかない。その内、パサン・カジの顔面が白^{ろく}騰色に変色し、手指の感覚も無くなっている様子なので、やむ無くC4へ戻る事にする。

翌日からついに冬の嵐が吹き荒れて行動不能となった。

1. 高所登山の実践と今後の課題

25日、C2のテントが吹き飛ばされたのを潮時に一時BCへ撤退することにした。

BCに下って5日間、風のおさまりを待ちながら休養した我々は大晦日から登山活動を再開した。

然し、年も改まり1月に入ってからは風に悩まされ続け、登っては成果もなく引き返すという状態が続いた。

それでも1月8日には名塚・佐藤の両名に依って待ちわびたC5が建設され、残す課題はイエロー・バンドの約16ピッチのトラバースのみとなった。

15日、田辺・名塚の両名はこの残された課題を解決すべくC5入りしたが、強風に阻まれて南峰へのルート工作に踏み出せず、17日には再びBCへの撤退を余儀なくされた。

最後のチャンスに賭けるべく登山期間を2月15日まで延長した上で、1月25日改めて上部への活動を再開した。

登山期間が2ヶ月に及んだため、アイス・フォール帯のルート変更はもとより、C1～C2間のクレバスも大きく口を開けるようになり、南西壁の雪も飛ばされて日増しに黒ずんで岩肌が露出してきた。

29日に2名が再びC5に到達したが、翌日から荒れ狂う嵐にまたしても撤退を余儀なくされ、C2に戻る。

2月に入っても西稜やサウス・コルを吹き上げる烈風の咆哮は止まず、いたずらに日数を喰い潰していった。

この絶え間ない烈風はシェルパ達の士気をもくじき、C5へのサポート拒否へとつながっていった。種々の要因を検討した結果、ついに2月9日、登頂断念を決定した。

*

冬の南西壁は取付点からロック・バンドの核心部までの約50ピッチは、殆ど氷雪壁にルートを取ることが出来る。春のようにスラブ帯が現れたり、秋のように雪崩に脅かされることもなく、壁のコンディションとしては最高のように思われた。BCからわずか16日という短期間でロック・バンドを突破出来たのもそのせいであろう。

それが何故登れなかったのかと言うと、幾つかの敗因があげられるが、やはり何と云っても風であろう。烈風がひとたびゴーゴーと咆哮すると我々は手も足もでなかった。冬の南西壁に立向かうのに寒さと風と落石は覚悟の上のはずであったが不遜であった。BCから荷上げを開始して以来実に83日間に及ぶ長い登山であったが、その大半は烈風のおさまりをひたすら願う忍耐の日々であった。

冬のサガルマータの場合、これ迄挑んだ過去の隊の経験などから、「クリスマス前の結着」という事は良く言われており、我々も短期結着を第一目標に臨んだ。唯、短期結着が着かない場合でも冬期初登頂を果たしたポーランド隊のように2月15日の冬期登山期間ギリギリ迄頑張るつもりでいた。これ迄12月1日から2月15日迄冬のサガルマータに粘った隊は皆無であったので、1月下旬もしくは2月

1. 高所登山の実践と今後の課題

に入れば風のおさまる日もあるのではないか、という淡い希望を抱いていたのである。然し、今冬期の経験から言えば一度風が吹きだすと12月上旬のような穏やかな日が続くことはなく、風がおさまっても1～2日で、また吹き出すようになり、やはりこの冬の嵐が吹き出す前に結着をつけないと冬期登頂は至難である、という思いを強くした。

短期結着をつけるには、8,000mを超えてからの隊員の登高スピードのアップも大きな課題の一つと言える。過酷の一言に尽きる厳しい気象条件下での高所登攀では体力の消耗は著しい。心肺機能、筋機能といった行動体力はもとより寒冷環境ストレス、低酸素環境ストレスなどに対する防衛体力もより以上に養っておかないと折角の行動体力も活かされない。これら双方を合わせた基礎体力を鍛練、向上させて、C4(7,600m)～C5(8,350m)間をせめて1時間当たり100m以上の高度を稼ぐような登高スピードでないと登頂は覚束無い。8,300mの高所でダブル・ユマーリングを強いられるルートだけに厳しいが、今遠征では一番の年長者が時間当たり140mの登高スピードで登っているのだから若い人達には可能なはずである。

*

何もかも凍つくような厳しい自然環境の中で、16名もの仲間達と83日間もの長期にわたって登攀活動を共にし、色々と学ぶ事も多かった。何よりも一番大きな収穫は、厳冬期のサガルマータ南西壁という気遣いじみた所へ立向かう無名の若いヒマラヤニスト達と生活を共にしたことである。この頼もしき若いヒマラヤニスト達は性懲もなく来年の冬、再び南西壁に挑戦する、と言う。悦ばしい事である。

(冬期サガルマータ南西壁登攀隊長)

1. 高所登山の実践と今後の課題

サガルマータ南西壁

